鉄砲洲神社　論語素読　解説

（平成 22 年 12 月 10 日）

雍也第六

25　子曰く、君子 博く文を学び、之を約するに礼を以てせば、亦以て畔かざるべきかな。

孔子が言うには、君子は色々な文献をよく読みこんで学びを深め、身に付けた知識をまとめて活用するのに礼という思想をもって行えば、世の中から背を向かれるようなことはまずない。

「博く文を学び」というと、真っ先に伊藤博文という人物が浮かんできます。吉田松陰が伊藤博文を、「周旋の才あり」と評したという話は有名ですが、伊藤博文は周旋の才（人と人とを結びつける小回りの利く人間）と言われたことが気に入らなくて、長い間、吉田松陰の弟子であることを自分から公表しませんでした。けれども吉田松陰の名前が広がるにつれて、最後の頃は、弟子であると公表したという話が残っています。

論語の中から名前を選ぶことは広く行われており、自分自身の文字も論語の中にあるかどうか確認してみるのもよいと思います。

26　子 南子を見る。子路 説ばず。夫子 之に矢いて曰く、予が否なる所あらば、天 之を厭ん。天 之を厭んと。

孔子が南子に会おうとしている。

南子は衛の霊公の夫人で淫乱で有名だったので、子路はそのような婦人に孔子が会うのは良くないことだと思い、孔子にとんでもないことだと主張したわけです。

孔子は子路の詰問に対して、たじたじとなりながら、私がもし南子に会って問題になるようなことをしたならば、天が私に対して天罰を下されるだろう。天が私に天罰を下されないということは、何もしていないのだと釈明をしています。

今の時代、孔子がこのような対応をしたという観点でみると、「子路説ばず」というような人物がまるで見当たらないと感じます。

27　子曰く、中庸の徳為るや、其れ至れるかな。民鮮きこと久し。

中庸とは、過不足なくバランスのとれたほぼ真ん中のことです。孔子の孫の子思が作った「中庸」という書物がありますが、これはここに書かれた中庸とは直接の関係はありません。

孔子が言うには、過不足ないバランスのとれた徳というのは、常に変わらない完全無欠のものだ。そういう徳をこの国で見なくなって大分経ったものだ。

中庸の人物・中庸の徳、これらがこの国から無くなって久しいものだなという孔子の述懐です。

今の日本に置き換えれば、中庸の徳などまるでありません。一昔前までの日本は教育が行き届いていて、「おはようございます」とか「失礼します」といった普通の挨拶が普通に出来ました。しかし今では、親が子供を殺し・子供が親を殺す、何の縁もない人間を殺すというような事件が多発しています。そういう国で、中庸の徳など求められようはずがないと考えます。それは教育が乱れに乱れてしまって、どうにもならないところまで落ち込んでいるからだと感じます。日本の再生は教育から始まるだろうと考えています。

28　子貢曰く、如し博く民に施して能く衆を済うこと有らば、何如。仁と謂うべきかと。子曰く、何ぞ仁を事とせん。必ずや聖か。堯舜も其れ猶諸れを病めり。夫れ仁者は、己立たんと欲して人を立て、己達せんと欲して人を達す。能く近く譬を取るは、仁の方と謂うべきのみと。

子貢が孔子に「国民に恩恵を施して一般大衆を救うことができるならば、仁と言ってよいでしょうか」と聞きました。

孔子が答えました。

「仁という言葉では不足であろう。そこまで出来るのであれば、聖と言うべきであろう。聖人と言われた堯も舜も、この問題が解決できずに苦しんでいた。したがってそれが出来るならば、聖人としか言いようがない素晴らしい人物である。仁を体得した人物は、世に出て志を立て自分自身が手掛ける事業を成功させようと考える時には、自分は一歩譲って人を立てる。事業の成功についても一歩譲って、他人が成功するように計らう。自分が一歩譲るということが、ごく当たり前に出来るようになっている。それが仁者である。自分自身の近く、身の周りから例をとるのは、仁に入るための方法を言っているのだと考えれ

ばよい」

　このような仁者も、先ほどの中庸の徳の人物も、事に望んでどのようにでも変化ができるが常識から外れない人物であると考えてよいと思います。

　来年の干支について少し触れておきましょう。

　来年の干支は辛卯（かのとう・しんぼう）です。干支学では 60 年周期で物事を考えますが、60 前は昭和 26 年です。この年は 2 月に東京を猛吹雪が襲い、3 月と 4 月に三原山の大噴火があり、10 月にルース台風で 1200 人以上が死亡したと記録にあります。

　「辛」は、辛く・むごく・悲しい。「卯」は殺すという意味があります。これらをあわせて考えると、平成 23 年は自然災害が襲う、人的災害も襲う。日本の国が坂道を転げ落ちるという年回りになっており、辛く・酷く・苦しい・悲しい年回りで、人が沢山死ぬであろうと考えてよいと思います。

　更にその前の明治 24 年は、1 月に帝国議事堂で火事があり全面焼失しました。10 月には濃尾大地震が起きて 7272 人が死亡しています。やはり大災害は 60 年周期で、それなりの大きなものが発生しています。

　平成 23 年はよほど氣合いを入れて、我と我が身で自らを守るということを実践しなければ生き残ってはいかれないだろうと感じます。その前段階として、生活保護を受ける人が更に増えるであろうと思っています。今、行政の全体でみると、年間予算の約 1 割を生活保護で占めているという話がありますが、どこまで本当でしょうか。もし本当であれば、これは大変な事態に日本国は立ち至ったと感じます。